

編集室から

今月号にご寄稿を頂戴した山村さんと初めてお逢いしたのは今から5年前の2004年3月25日。処は、伊勢でした。

ご当地には伊勢湾口の対岸である渥美半島との間に長大橋を掛け、三重県と静岡県を結ぼうという遠大な構想があるそうで、事例として能登空港の開港を巡る地元での活動報告をせよと、依頼を頂いて伊勢に出向いたときでした。私は前座で、山村さんの素晴らしい半生と富士山麓での自然豊かな暮らしを絡めたお話がメインの講演会でした。

テレビで拝見してはありましたが、とても優しいお話し振りなのに、パリダカでの過酷なラリーのお話の内容とのコントラストに惹き込まれたのを今でも、記憶しています。

私が生まれた家から富士山がドカンと見えたことを覚えています。さすがに山麓からの富士は巨大で圧倒されます。その存在感から大抵の人は長く住む事はできないとも聞きましたが、山村さんは何とその山麓にお住まいなんです。穏やかな里山・里海に囲まれている能登での田舎暮らしと違い、ちょっとやそっとの覚悟では真似できることではなさそうです。

その後、ご無沙汰して失礼を差し上げておりましたが、静岡の友人からのご紹介で、この度のご縁を頂くことができました。紹介してくれた友人は、寄稿の御礼に冬場のための薪割り奉仕を申し出たとのこと。これは是非とも僕も馳せ参じて喜んで御礼の薪割りをさせて頂きたいと立候補しています。

能登のような優しい処でさえ、自然と向き合っていると、都会は人工に過度に守られていることに気づきます。代わりに精神にとっては、厳しく辛い環境であることも。

心身ともに丁度良い暮らしを人間が獲得するのは、いつなのでしょう。 (は)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2009/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

文 月



能登・薬師の里にて
by hama

寄稿『徒然なるままにお片付けー人生はエンドレスの旅なりー』 山村レイコ

ああ、忙しい、忙しい。何だかとても忙しくない。何が忙しかと言いつつ、忙しくない世界に行きたいが為の“通過儀礼”をしているからです。そう、今私は、人生を片付けることに夢中、昔から片付けはライフワークでしたが、そこにパリダカ並みのスピードが加わって、もの凄い勢いで「ト」が進んでいます。実は最近、なんだか“持つこと”が苦痛になってきました。ゆえに、着ない服を処分したり、膨れ上がった「ト」の内容をどっさり削除したり、部屋を片付けたりで、一日の半分が過ぎていきます。

オートバイに積める荷物だけで旅していた昔のように戻りたい訳ではないけれど、昔は羽根のように何処までも軽かった。4年前に家を建てたのですが、それがよかったのか悪かったのか。歴史の評価が後になって分かるように、自らそれを感じるのは、もっと後のことのようにです。二十代の頃は、四畳半のペントハウス生活でも不満ひとつなく、あらゆる国を旅していました。今は、馬や山羊などたくさん動物がいるので、敷地が何千坪にもなり、毎日が管理と動物の

世話と掃除で過ぎて行きます。動物は最大の癒しですが、とにかく、もっと小さくもっと狭くもっと簡素に、でもゆっくりに自給自足のよう暮らしたくて、そこへ行くための準備という訳です。

そんな私の究極の願いは、いつかパソコンに回かわずとも生きられること。大好きな車ですが、持っただけでも使わない生活も叶えられたら凄いなあ。私の魂は、「もっと畑に出たい!」「もっと芸術時間を増やしたい!」と常に訴えています。「叶えてあげるぞー、オーッー!」。今までの生活にもなかった新しいやり方は、きっと進化した自分に出会えるはず。その軽くて楽しい世界は、そう遠くない気がしています。でも、私の性格を知る相棒は、「忙しさは変わらないよ、きつ」と、隣でほくそ笑んでいます。

うーん、かもね。

【プロフィール】

(やまむら ねいこ)

一九五七年東京都出身。エッセイスト&元国際リリースト。十八歳でバイク・車・旅関係の著述活動を始め、二十九歳でパリダカなど砂漠のラリーに多数出場。三十七歳より朝霧高原に住み、畑にも精を出す自称「自然回帰型生活むこ」。



濱のいびき』『生きる力』

六月の週末は、小型船舶操縦士の学科・実技試験が続いた。

土日の一日半を掛けて百六十七頁に及び教本と八百八問の例題集を学び、日曜の午後試験。四択なので、船長心得など落ちていて問題を読むと正解できるものもあるが、浮標や灯火・信号、法令などは、知らない箇所が立たない。この免許は、二十トン未満の殆どの船舶を操縦できるので、船の構造や発動機などの範囲も広い。大型タンカーや作業船などの航法では、改めて『海には車線も信号交差点も、行く先を示す標識も無い』ことを実感。船長の責務は大きい。

学科試験は解答を何度か見直し、もう間違いは無いが念のためと見直してみても、一問間違いに気付いた。この設問・解答は、例題集でも何故か誤回答を正答と誤認して何度も間違えていた。

帰途、満点の充実感を味わっていてふと、最後の誤答の「深意」に気付く。

人は勝手に誤りを正解と誤認識し、正しいと信じ込むことがある。しかも、それを誤認だと気付くこと、誤りを素直に訂正することは至難の業であるという事だ。今回は試験という判り易い形であったが、暮らしの中で、あるいは生きていく中でそのものの中で、自らの誤認を一生気付くことすらなく終えることが、実は多くは

無いか。誤認を『誤認である』と気付き正せることの大切さを、あの一問は教えてくれた。

習題の実技は、波も日差しも穏やかでこれほど無い天候に恵まれた。二十数年前、義父から船の立て方、うねりや天候の見方の基本は教えてもらっていた。それらの智慧も手伝って、楽しみながら受講・受験ができた。有難いことだ。

学科・実技を通じて説かれたことは、荒天時に海に出ない勇氣と、人命救助。他船への配慮も併せたシーマンシップ。

大都会への出張は、あまりにも人工に守られていることを感じる。厳しい自然に対峙する先人の願いとして、それは実現したのだろうか。しかし、過保護が人の「生きる力」を削いでいるとしたら……。

歴史を紐解くと、海は人と人とを隔てるものではなく、高速交通機関の無い時代、より遠方同士をつなぐ唯一のしかも、場合によっては陸路よりも安全な路であったという。

教育現場で「生きる力」が注目されたが、「海や山に向き合う」ということは、本来持っている管の能力を呼び覚ますことに他ならないのではないか。

日本は本来、豊かな瑞穂の国。ほんの少し認識を変えて見直すことで、新しい暮らし方が観えて来ないだろうか。

「生きる力」が復権し、都会と田舎のバランスを謳歌できる暮らし。それは、意外に近くにあるはずだ。

『就職氷河期に思う』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

大学生の内々定率が5月末で63%。これは昨年同時期と比べて13ポイント低下したということだ。どうやら就職氷河期が再来したらしい。

就職氷河期という言葉は、1992年頃から使われ出した言葉だ。当時はバブル崩壊後の就職難の時代だった。

当時と今の大きな違いは、1992年という時代では、まだ団塊ジュニア世代が社会に出る前で、彼ら彼女らは高校生から大学1年生くらいだった。つまりまだまだ沢山の若い世代の人間が、後に控えていた中での就職氷河期だったのである。

ちなみに、1992年に大学4年生になっていたと思われる22歳人口は190万6000人いた。そして、団塊ジュニアのピークが22歳を迎えたのは1995年で、この年の22歳人口は203万6000人である。

さらに言えば、この団塊ジュニアの親に当たる世代が文字通りの団塊の世代で、1947年から1949年生まれの人達だ。この人たちは一世代で270万人いる。この団塊の世代の人達が今まさに定年退職を迎え、ビジネス生活からリタイアメントし始めている。

このタイミングで、世界的な不況が到来した。だから企業はスリム化せざるを得なく、新卒採用、中途採用の縮小化ないしは見合わせを行っている。

このまま行くと、これから数年間は卒業無業という若者たちがかなりの数で出てきそうだ。つまり、就職先も進学先も決まらず社会に出なければならぬ若者たちだ。どんなに努力しても、構造的に正社員として就職できない。可哀そうだが、今のままではいかんともしがたいことである。

ところで、今年就職活動している大学4年生に相当する22歳人口はいったい何人ほどだと思いますか？

何と驚くなかれ135万人しかいない。ピーク時から10年ちょっとで世代人口が2/3になってしまった。そして昨年1年間で生まれた赤ちゃんの数は109万1000人。恐ろしい勢いで若年人口は減っている。

この不況はいつまで続くのか分からないが、今度景気が好転し始めた時は、圧倒的な若年労働力不足となると予想される。

今はどこの企業もそんな先のことなど考える余裕がないので、逆に人を減らすことに頭を悩ませているように見える。

人の裏をかいて、この時期に人材投資すれば、かなり投資効率がいいのだけど、そんな企業は少ないというのが現実だ。

『節約を考えて』

合同会社アイアイシー 星山 道弘

銭湯はとてまたくさんのエネルギーを使います。お湯を沸かすにはガスや重油。浴槽の湯をキレイにするためには濾過器を動かす電気代。泡のお風呂を作るのにもモーターが働き、浄化槽ではたくさんのポンプが動きます。

少し前までエネルギー費は売上の約15~20%を占めていました。この経費を抑えるためにいろんなことを行いました。水圧を抑えて湯の使用量を減らしたり、廃熱を利用する自家発電システムを導入したり。でも水圧を抑えると、入り心地の悪いお風呂になってしまいます。ですからこういったたぐいの節約の限界は案外近かったりします。自家発電は重油でエンジンを動かし電気を作って発電します。そしてエンジンで出来た熱をお風呂の湯として利用します。一見効果は大きそうですが設備が複雑なだけ大変高価でした。でも結局イラク戦争に始まった外的要因で原油高。メリットが出なくなってしまいました。(重油で電気を作るより、電気を直接買った方が安くなった)

こうやっていろいろ試している間も、ありとあらゆる節約業者さんからの営業の攻撃に惑わされます。節水コマとか、電気代を節約する怪しい機械など。

銭湯は節約業者さんのターゲットなんですね。

しかしどれを採用してもなかなかうまくいかない。効果の高いものは比例してイニシャルが高くメリットが出るには時間がかかる。だから節約する設備を自社開発することにしました。

中でもうまくいったものがお風呂のふた。要はレジャー用の発泡マットをお風呂に浮かべること。冬で20%、夏で10%程度の燃料費を節約することができました。かかったコストは2万円程度で年間数百万円もの節約が可能になりました。

次にうまくいったのは、ボタン式シャワーの導入。通常の銭湯では使用しないタイプを利便性を落とさないように、ちょっと工夫して安価に設置。こちらの節約効果も絶大。お風呂のふたとほぼ同程度の燃料費を節約することができました。

最近では開発するのが楽しくなって、排水から熱を回収する設備を作ってみたり、貯水タンクを黒で塗って太陽熱を回収しようとしたり。そうと思ったら設備メーカーからの共同開発のお誘いがあったり。

いろいろ試してわかったことは、効果が大きいものより、売って利益のあるものが世の中には広がる。だから本当に効果の大きい(短期間でペイできるもの)は世の中には売ってないんですね。まあお金が無かったから開発できたとも言えるわけですが、節約に関わる商品に限らず、本当にいいもの、本当にお値打ちなものがほしかったら自分で考えるほうが良さそうです。良い物が世の中に広がりにくいのは寂しいですが、どうもこれに限るようです。

6月17日、16年間お勤めになった石川嘉延知事が退任されました。

知事にはいくつか思い出があります。

平成9年3月、由布院温泉観光協会長の中谷健太郎さん、旅館組合長の富永等さんはじめ役員の方々が、静岡県が私を湯布院に派遣してくれたことに対して、お礼の挨拶に知事室を訪ねたときの場面。

中遠県行政センターに視察に来られた時に「お！君何やっている？」

「知事、何やっているって？パスポート係ですよ、パスポート係」と答えましたら、翌日の幹部職員会議で「鯉をたらいに入れておくような人事をするな」と仰ったこと。

そして「NPO推進室」に異動になったときには、知事の直接の人事だったと県議から聞かされました。このNPO推進室で学んだことが、今とても役立っています。まちづくりには水平関係の対話が欠かせません、その技術をしっかり学びました。

私たち県庁職員に「県庁新聞」の中で下記の言葉を残してくださいました。

「教養あふれる静岡県庁たれ」

この16年間、職員の皆さんには大変お世話になりました。

激動の16年間でしたが、皆さんの奮闘よろしきを得て荒波を乗り越え、新しい時代に向けての静岡県の基礎づくり、力の向上を果たすことができました。心から感謝申し上げます。

最後に皆さんに残す言葉として、「教養人たれ」と述べておきたいと思います。

平成になって以降、「教養人」とか「知識人」、「インテリ」といった言葉が死語になりつつあります。

「知識人」という言葉は、かつて人々の「より上の学校で知識を習得したい」という思いを掻き立て、いわば戦後の高学歴志向をドライブした言葉でした。

ところが、元来知識さえあればよいというものでもなく、ITが発達した今日では、知識を蓄えるよりネットで調べるほうが早いということもあり、「知識人」という言葉は死語になってしまいました。

さらに、多くの人々は「教養」という言葉を「知識」に重ねて理解しており、「知識人」と同様に「教養人」という言葉も使われなくなっています。

しかし、「教養人」とは、どのような社会環境の下にあっても常に自分を客観的に観察できる視点と、そうするだけの基礎的な素養を持っている人のことを言うのであり、広く専門的な知識を身につけただけの「知識人」とは大きく違うのです。

このことを私はかつて政治学者として名を馳せた丸山眞男氏の講義で聞いたのですが、そのように「教養人」を定義すると、自分を客観視するという困難な試み古くから様々に取り組んできた先哲の言説を学ぶことの大切さがよくわかります。

静岡県庁には、是非「教養の人の集団」になっていただきたいと思えます。

これは「富国徳」の「有徳」にもつながります。個人のレベルのみならず、県庁の組織、静岡県そして日本という国を常に客観視しながら、現在直面する様々なテーマに取り組むのが重要なのです。

「教養ある人々」が組織する「教養のある県庁」、「教養あふれる静岡県」に期待します。

期待に応えなければなりませんねえ

※写真は富士山静岡空港内覧会で挨拶する石川知事

そして、7月23日に静岡から小松に飛んでいく静岡県で生まれた新しい航空会社「フジドリームエアラインズ」の真新しい機材です。

石川県の皆様方との多くの新たな出会いが待っています。

